

日本統治下台湾人用国語教科書にみる都市と農村

著者	陳 虹?
著者所属(日)	平安女学院大学国際観光学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	16
ページ	34-42
発行年	2016-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001321/

日本統治下台湾人用国語教科書にみる都市と農村

陳 虹彬

要 旨

日本統治下の台湾において、1930年代には都市と農村の教育格差が議論されるようになった。本研究は台湾人向けの国語教科書を対象に、都市と農村の格差問題について検証を行った。検証の結果によると、農村の公学校においては確かに教育上の格差問題が存在しており、当時の公学校及び社会教育に属する国語講習所の国語教科書の使用や編さんにも影響を与えていた。そして、使用対象が異なることにより、教材の選択においても違う方針が取られていた。

はじめに

近代社会の発展とともに、どの国でも都市と農村の関係が問題となっている。特に都市と農村の格差による教育上の問題は現代のみならず、近代の学校教育制度が成立して以来、経済や社会の発展に伴い、学校の所在地や経済産業の構成も学校教育に影響を及ぼしてきた。台湾もその例外ではない。

台湾での都市と農村の格差による教育問題は日本統治時期にすでに存在していた。経済的利益を植民地統治の主な目的とする台湾総督府は、台湾で鉄道などのインフラを整備し、農産物の生産や工場建設などの経済開発を行ってきたと同時に、近代的な学校システムを作り、植民地統治の目的に合致した教育を施してきた。そして、経済活動や交通の整備が進むにつれ、台湾社会と一般民衆の生活、そして学校にも様々な変化や様々な問題が現れてきた。その一つが都市と農村の格差問題である。

実際、1935（昭和10）年頃、公学校第四期国語教科書の編纂にあたり、当時担当の総督府編修官加藤春城が事前に都会と農村を意識しての学校視察を行った。また、当時の教育関連雑誌にも都市と農村の格差問題を意識した現場教員からの寄稿が掲載されていた。本稿においては、公学校の国語（日本語）教科書及び未就学の台湾人青少年を対象とする国語講習所の国語教科書を対象として、都市と農村の問題がどのように扱われていたのか、どのように教材に反映されたのかを明らかにしようとするものである。

一、公学校教育における「都市・農村」問題の提起

高成鳳の「植民地鉄道と民衆生活」によると、「かつて清代の台湾では、台北・台中・台南を中心にそれぞれの地域が独立した市場圏」が形成され、台湾の北部、中部、南部がそれぞれの経済圏を持ち、南部から直接北部へ、もしくは北部から直接南部への物流ルートが存在していなかった¹⁾。日本の植民地統治が始まると、台湾の西部を中心に鉄道の「大動脈縦貫線から末端の糖業軽便鉄道に至る所鉄道網および道路網」が整備された。これは元来「台湾の資源を吸収し、基隆など鉄路末端の港から日本への搬出するためのもの」だったが、結果として「台湾全島をひとつの市場圏」にまとめることにもなった。しかし、植民地統治の経済的な目的を優先とする前提で行われた交通整備は、高が指摘した通り、当時台湾各地の地域住民にも複雑な民族問題や地域問題を投げかけた²⁾。

植民地台湾の産業は「日本統治時代を通して、農産物をはじめとする一次製品の生産と輸出の拡大に中心が置かれていた」ので、交通の整備に伴い、これまで三ヶ所に集中された農産品の集散地が西部に縦貫する鉄道沿線の町が発展していった。地域によって特化された経済活動やそれに伴う開発及び工場建設などの拡大により、「都会」と「田舎」、すなわち都市と農村明確に区別化され、必然的に

教育面にも都市と農村の「差」が現れてきた。

台湾の近代学校制度は植民地統治下に導入されたもので、植民地統治の目標を遂行するために台湾人に日本語教育が施された。1898（明治31）年に台湾人生徒が通う初等教育機関「公学校」が設立され、教育の基本方針は台湾総督府によって決められていたが、公学校の設置や学校を運営するための経費などは各地方の街庄が負担することとなっていた。運営主体となる街庄の設立団体の経済力や地域住民の支持により、公学校の運営にも差が出るのが現実だった。では、農村の公学校教育と都会地の公学校との間にどのような差が存在していたかについて、現場で教えていた公学校教員が『台湾教育』に寄稿した内容をもとにまとめてみよう。

公学校教師の張清波が1925（大正14）年に「台湾教育」に寄稿した「農村教育に就ての私見」³⁾では、植民地統治が始まって以降、「30年来農村の進歩は見違えるほどだったが、農村の問題は教育の問題だ」と断言され、従来「教育は都会の人のための仕事殊に農村百姓は無教育でよいと相場は定めていたが」、「教育を徹底し普及を期するには国民教育の方針内に於て」、「農村ではも少し農村生活と農業に関する知識を与へ、理解を得しめ、愛着を感じしめ、又多少は実在の技能を養ふを得せしめるに足るものを加へ、之を加ふるによりて生ずる教課上の負担の増加」や省略は必ずあるとされている⁴⁾。張は通常教えている教授内容以外に、農村ではさらに農村生活や農業に似合うような教育内容が必要だと主張しながらも、それが農村教員への負担になってしまうと指摘している。そして、その負担の一つは親によるものだった。

張によれば、農村の親が子供を登校させない口実には、学校へ行っても本は読めない、自分の名前すら書けない、卒業しても手紙すら書けないから、就職できない、学校に入った子は大抵家業を嫌うようになる、子供を中学校に入れる資産がないから、公学校へ行かせても無駄だ、中学校へ入学する見込みがないから、体操や農業の授業をやめて、漢文や農家に実用する記入数字を教えてほしい等々があった。農村の親からすれば、お金を出して学校へ通わせても、卒業したら家業である農業を手伝ってもらえる保証がなかった。つまり、農村公学校の卒業生は地域社会の期待や需要に十分にこたえることができなかった。また、公学校を卒業したものは大半農村に残るが、公学校教育を受けたことによって、成績の良いものは逆に農業という家業を嫌い、よそへ就職しようとするのが現実だったようだ。よって張は、「公学校は国民としての素地を作り、愛着なる子女を養成する処である」が、都会と同じように教育するのは逆に農村の害となると述べている⁵⁾。

では、当時台湾の農村児童には何を期待されていたのだろうか。黄連發の「農村と子供」⁶⁾によると、農村の子供たちは公学校へ行けず、書房へも通えなかったが、遊んでいるわけでもなかった。その大半は朝から晩まで親の仕事を手伝い、男女を問わず「子守、炊事、掃除、水汲、米搗き等の家庭での仕事や、田圃の岸塗、除草や草刈等の野良仕事」をさせられていた。肥拾いや豚糞拾い、山菜摘み、柴草拾い、牛飼いかから、食料となるものを拾うこと（粟拾い、甘藷拾い、落花生拾い等）までがすべて農村子供の仕事だった。子供とはいえ、貴重な働き手でもあったからだ。その貴重な労働力を学校へ行かせ、卒業後家の畑や家業に役立ててほしいと期待するのは言うまでもないが、前述のように、実際農村公学校の卒業生の「成績の良いものは逆に農業なる家業を嫌い、よそへ就職しようとする」となると、農村の親たちが勉学に反対する心情も理解できる。

また、農村教員であるいそきんちやく生は「農村に於ける公学校卒業生は何処へ行くか」⁷⁾において、1925（昭和1）年度の学事年報を用いつつ、台湾で年々三万近く出ている公学校卒業生のうちに9割以上は直接、生産や販売業に従事しており、その中でも「公学校卒業生の四割強を占むる」のは農村公学校の卒業生だと言っている⁸⁾。しかし、都会公学校の卒業生が新しい文化に触れることや勉学の機会が多いのに対し、純朴な農村地方にいる青年は素朴さこそ持っているものの、「智力」と「常識」においては大きなハンデキャップがあると指摘している⁹⁾。つまり、「公学校に於ける卒業生

の学力が、公学校の基礎教育を土台として、健全に順調に、成長発展しつつあることを肯定し得ないのである。却って年一年に退歩しつつあることは、争えない一般的事実とみられている」という。

さらに、いそきんちゃん生は農村公学校において、そのようなハンデキャップが出来てしまう理由として、次の7点を挙げている。①農村に於ける公学校設立団体の経済状況が比較的弱いため、複式学級教授など基礎的教授に欠陥が生じている。②詰め込み教育に流れ、自学自習の態度が確立しない。③校長などの人事変動が多い。④人事変動により発展計画が続かない。⑤職員の移動も頻繁。⑥有力なる卒業生指導対策がなされていない。⑦農村では、勉学は家業に大きな影響を出すため、卒業後勉学の習慣も廃れる。

要するに、農村は経済面や生活面で都会地に劣っているため、その影響は学校の人事異動率や生徒の親たちの考え方にまで及び、最終的に公学校教育自体にも悪影響が出ているというのである。また、前述した張の論文でも農村公学校教育の改善策として「農村についての認識を教師、農業講習会、師範教育の改善、実科教育の振興」が必要だと述べられ、都市と農村においては環境や生活条件に差があるため、農村に似合った改善策が必要であるとの主張されている¹⁰⁾。

残念ながら、これらの寄稿に言及されている農村と都市における教育格差の問題は、これ以上議論を呼び起こすことがなかった。さらに、農村の状況について寄稿や発言をしたのは公学校で主導権を持たない台湾人教員が中心であり、この問題に関心を持っていたのは台湾人教員が多かったのではないと思われる。

二、国語教科書の編纂方針にみる都市と農村

植民地台湾で使われた台湾人向けの「国語教科書」には、公学校用の国語教科書以外に、国語講習所の国語教科書もあった。国語講習所は昭和期から強化された「国語普及」の一環として、未就学の台湾人青少年層を対象に国語教育を施していた。ここからはこの二種類の教科書を対象に考察を進める。

(一) 公学校用の国語教科書について

日本統治下の台湾において、全五期計六十冊の国語教科書が編纂・発行された。第一期から第三期の国語教科書にいたるまでは、編纂趣意書や編集関連資料に都市と農村を意識するような記述はなかったが、第四期の「公学校用国語読本」では、編纂計画を準備している段階から都市と農村の違いを意識した学校視察が行われていた

台湾の公学校用第四期と第五期国語教科書の編纂責任者加藤春城は1935（昭和10）年に、「国語教授の現況とりわけ児童の国語力を見る」ことに重点を置き、台南州と高雄州下の合計30校を視察した。加藤の視察報告¹¹⁾によれば、視察の時はなるべく「都会と農村」の両方かねて視察を行ったという¹²⁾。視察後の感想として、加藤は都会と農村両方の生徒はともにまじめであり、近年「交通の発達」により、農村にも以前より情報が入るようになってきているため、「農村の五、六学級位の小さい学校」でも、努力しているところは「都会に負けない位實力」を持っていることができると述べ、「交通機関の整備に伴う都会と農村との接近は、今後益々農村公学校に於ける国語教育上の不利の点を緩和する」と期待している¹³⁾。

しかし加藤はこの視察で、生活環境が生徒たちの生活経験に大きな影響を与えており、そのことに教育現場の教員たちも気づいていなかった事実を発見した。例えば、第三期公学校用国語読本巻五の九「ティシャバ」は实际的知識と関連性のある教材であり、事前に児童がどれだけ知っているのかを調査しておかないと教授できない教材であるのに、加藤は視察した公学校で、直接生徒たちに聞いてみたところ、「停車場から一里半離れたところの公学校の三年生で汽車に乗ったことのあるものが一

人もなく停車場を見たことある人が二、三人しかなかった」。また、「半商半農位の小都会の公学校の四年生で苗代を知らないものが大部分であった」ということを知った。加藤はこのような状況を「まことにうそのような事実」だと述べており、案内してくれた校長と視学官も「意外ですねえ」と話していた。

このような状況について、加藤は事前に児童の経験を調査しておくべきとの解決法を提示しながらも、「事実を予め知っていて教授するとなれば、そこに相当な用意も生まれてくる」と指摘している¹⁴⁾。つまり、当時の教科書を用いて国語を教えるのに、事前に生徒たちの予備知識を調査しておかないといけなくなると、その予備知識の差を解消するための授業準備が相当に大変だということである。

その後、加藤の視察結果は第四期国語教科書を編纂するときの参考となり、1937（昭和12）年に第四期の新しい国語教科書が刊行されることになった。しかし、加藤の口述によってまとめられた第四期国語教科書の編纂要旨では、あらかじめ都市と農村を意識して教材の採択や編集について説明されることがなかった。一部の教材に関してのみ、都市と農村での扱い方について言及されていた。例えば巻二第二十三課の「町の夏の朝」は農村の風景を中心に描写されたもので、そこには「町の児童にはこれ以外の事実をも問答し、農村の児童に対しては、農村の朝の様子を話させるがよからう」と記されている¹⁵⁾。

そもそも、公学校教育は一般台湾人児童を対象とする共通の学校教育であり、その国語教科書も台湾総督府の教育方針下に置かれて作られ、国民教育の目的を持たされている以上、教材の共通性になるべく配慮することが基本となっている。しかも加藤は農村と都市の問題はさらなる交通の発達によって解消されるとも述べており、公学校用の国語教科書においては都市と農村の差がわかるような教材はむしろ最低限に抑えられ、避けられない場合は教授時の説明や補充教材で補う方針が取られたのだと考えられる。

（二）国語講習所用の国語教科書について

1930年代前後の台湾では、国語を普及する流れに合わせ、1929（昭和4）年から未就学の一般台湾人青少年を対象とする国語講習所が設置されるようになった。「未就学の一般台湾人青少年」とは、昼間に仕事や家業のお手伝いがあるが公学校へ通えなかった台湾人の若者たちのことである。仕事が終わってから講習所へ通い、夜に学んだ日本語をすぐに昼間の仕事に役立ちたいという目的を持つ人が多かった。また、農村部や半商半農の地域においては、農業の閑散期など特定の時期にしか通えない人が大半を占める講習所もあれば、地域の産業に合わせるように授業の内容を調整する講習所もある。つまり、国語講習所には日本語教育の「速効性」かつ「地方による特異性」に適応することが求められている。このような特徴も国語講習所の教科書編纂、出版、改訂に影響を与えることになった¹⁶⁾。

国語講習所用の国語教科書として、1933（昭和8）年の「国語普及十ヵ年計画」に合わせ、台湾教育会の出版部は1931（昭和6）年から編修計画を立て、1933（昭和8）年『新国語教本』を刊行し、全島に配給するに至った。最初から台湾総督府は国語講習所用の統一した国語教科書を発行する意向を有していたが、最終的には台湾教育会が編纂・出版を担当することになった。

1、1933年版の「新国語教本」

国語講習所用の国語教科書のうち、最初に都市と農村を意識して編纂されたのは1933（昭和8）年版の『新国語教本』であった。当時の編纂責任者は台湾教育会の編修部長、同時に台湾総督府編修課の課長でもある編修官三屋静だった。三屋によれば、その編纂上最も注意すべき事は「都市用にもなり、農村用にもなる両方に融通のきく編纂方法」であり、「教材の取舍選択をすれば国語講習所にも

簡易講習所にもと云う点に編纂方針」を定めた¹⁷⁾。すなわち、農村用にも、都市用にも、そして国語講習所でも、簡易講習所でも使用できる幅の広い内容を目指そうとした。

のちに刊行された1933年版『新国語教本』の教授書に掲載されている教授方針には都市と農村での扱い方についての説明はなかったが、前述した三屋の方針の通り、教本の中に記載する会話は土地の実情によって適宜に取捨選択することができると明記され、実際の状況に注意を払うことが強調されていた。

2、1939年版の『新国語教本』

1939（昭和14）年に、当時の総督府編修課長こと台湾教育会出版部長加藤春城の主導で、新版『新国語教本』（全二冊）が編纂された。加藤が主導した1939年版教本の特徴として最も目立ったのは、初級教材の選択配置、教材内容の変化、教授書に提示されている指導方針などの変化であり、そして「テーマ別」の読本の出版であった。1933年版教本の巻3の代わりに、国語講習所二期生以上の青年男女や大人向きの教科書として『公民読本』、『農民読本』、『商工読本』が発行され、各地方の必要に合わせて教本を選べるようになった。さらに、1942（昭和17）年には、従来『新国語教本』を用いた短期間の「簡易国語講習所」にも専用の『簡易国語教本』も出版された。

また、1939年版『新国語教本』巻一の教授書の「緒言」には、新教本の教材構成は旧教本とは異なり、「卑近なる公民的教材」、「実業的教材」、「趣味的教材」三種類の教材を都市・農村両方面に亘り、広く蒐集して編修されたのであるとの説明もあった。1942（昭和17）年末の『台湾教育』に掲載されている「台湾教育会出版図書目録」によれば、公民読本（摘要：新国語教本第三巻該当）、農民読本（摘要：農村用、新国語教本第三巻該当）、商工読本（摘要：都市用、新国語教本第三巻該当）の三冊の教科書が載せられており、出版されたことは確認されたが¹⁸⁾、残念なことに、未だその現物を発見することは出来なかった。

このような変化は国語講習所が求める日本語学習の「速効性」と「地方の特異性」を優先的に配慮した結果であり、当時の都市と農村における教材問題を解決しようとするやり方であったと考えられる。

三、教材にみる都市と農村

公学校や国語講習所が用いるテキストの中にはっきりと都市と農村をテーマにした内容はなかったので、実際に公学校や国語講習所で使われていた教材を見る前に、当時の台湾では都市と農村の「違い」はどのように考えられていたのかを、「青年学習書 巻一」に収録されている「都市と農村」¹⁹⁾という教材の一部を通して紹介したい。

「都市と農村」

「我等の郷土は農村か都市かの何れかであるか現代に於ける農村生活と都市生活との間には、かなり著しい差異が認められる。農村にあっては人口が分散して人家が方々に黙在して居り人々は自然を友とする農、林、漁業にいそしんでよく隣保団結の美風を保っている。これに対し都市にあっては人口が集中して住宅が軒を連ねて居り、人々は喧しい騒音の中に商工業をいとなんで居る。そして農村に風光の美しさがあれば都市に文化の巧みがある。かれに健康の源泉なる幸あれば、これに知識の淵叢たる喜びがある様に両者には又異なる特色を持って居る。此の様な農村と都市との関係は経済生活の發達の結果生じたものであるが、同時に農村と都市とは密接な離れられない関係に立って居る。即ち都市の消費する米、野菜、肉、薪炭の様な生活必需品や工業原料品は主として農村がこれを生産し、農村の消費するいろゝの加工品は殆ど都市が生産する。従って農村の繁栄はその購買力を増大して都市の殷賑を招来し都市の活況は農村生産物の需用を


多くして農村の景気を引き立てる、農村と都市とは経済的にまったく相互依存の関係にあるのである。……（後略）。」

この「都市と農村」によれば、「都市」というのは「商工業」が中心で人口も住宅も集中しており、「文化の巧み」を持っている。それに対し、「農村」は「農、林、漁業」が中心で人口も分散しており、「自然の美しさ」がある。両者は「経済生活の発達」によって生じた結果だが、密接な離れられない関係にあると述べられている。この基準にもとづき、公学校と国語講習所の教材を見てみよう。

（一）公学校用の国語教科書について

公学校で使用されていた国語教科書の編纂において、都市と農村を意識し始めたのは第四期教科書の編纂計画が立てられ始めた頃のことだが、それ以前の台湾はまだ農業中心の町が大半なので、教材を取り入れるときも農家の設定が多かった。例えば第三期教科書巻三の二十五の「私ノウチ」がそうである（表1）²⁰⁾。

表1 第三期『公学校用国語読本 第一種』巻三の二十五「私ノウチ」

<p>私ノウチハミンナデセ人デス。オトウサントニイサンハアサハヤクカラ、田ヤ畠ヘイカレマス。オカアサンハウチデ、センタクヤヌヒモノヲナサイマス。弟ハライネンカラ学校ヘイキマス。イモウトハミツデ、ヲトツヒカラオチチヲヤメマシタ。イモウトノモリトニハトリノセワハ、オバアサンガナサイマス。ユフハンガスムト、ミンナデオモシロイオハナシヲシマス。私ハ学校デヲソハツタコトヲハナシマス。</p>	
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------

このような教材は第四期の国語教科書では減少し、農村と都市で兼用する教材が主流となったが、初中級段階の教材は児童の実際生活経験に基づいて編纂するのが基準となっていたため、一部の教材も農村や都市にしか見られない風景を取り入れている。例えば巻一に採用されたガジュマルの下での挿絵（図1）は台湾の「南部平野あたりではよく見受ける」風景と編纂要旨に説明があり、「露店で茶を飲み、物を食べている労働者たちが最小限度の必要を満たしているので、児童の買食と混同してはならない」と教授上の注意点も言及されている²¹⁾。

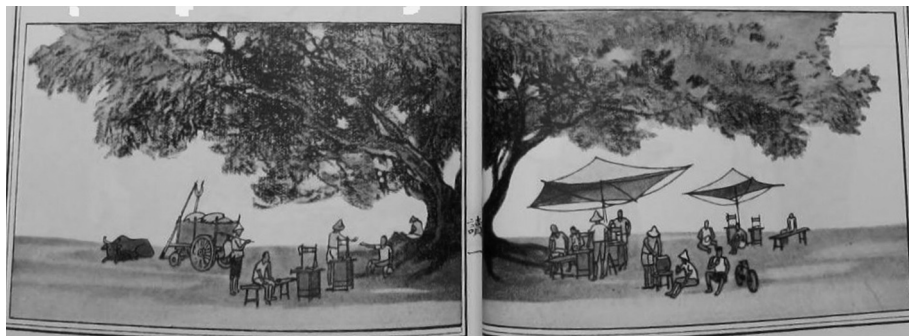


図1 第四期『公学校用国語読本』巻一 58.59 頁

卷二の第一課にも農村の景色である「稲が黄熟した田圃の光景」(図2)が取り入れられている。編纂要旨の説明によれば、「農村の児童がこれに関心を持つことは自然でまたさうなくてはならないのである」ものとされるが、挿絵に描かれた「稲扱器械は新式の足踏式のもの」にするなど、細部までこだわっている。ただし、農村限定の風景なので、「都会の児童も足一度郊外に出ると、これらの光景に接することが出来るから、取扱に困ることはあるまい」との説明も付け加えられている²²⁾。

一方、都会限定の風景を描いたものに、卷二第二十三課に描かれている「町の夏の朝」(図3)がある。教材の取扱については「町の児童にはこれ以外の事実をも問答し、農村の児童に対しては、農村の朝の様子を話させるがよからう」と説明されている²³⁾。

ただし、農村や都市の違いがはっきりと表現されているのはこれらの教材だけで、ほかの教材はほとんど都市や農村で兼用できるようになっていた。

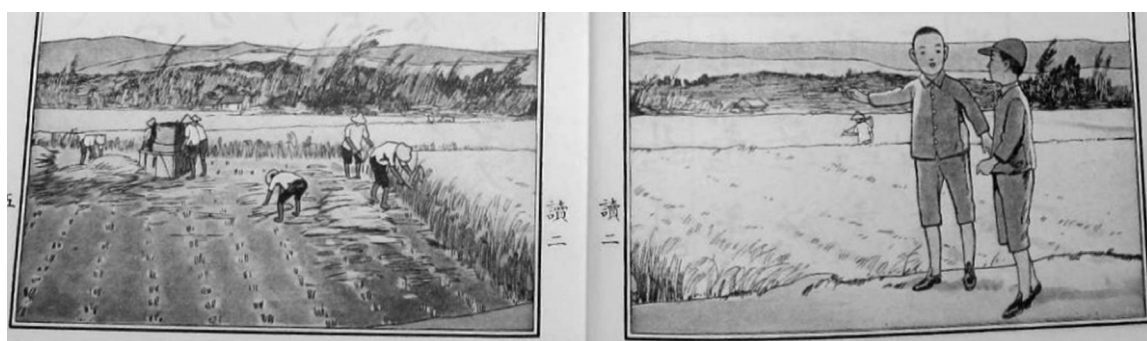


図2 第四期「公学校用国語読本」卷二の第一課

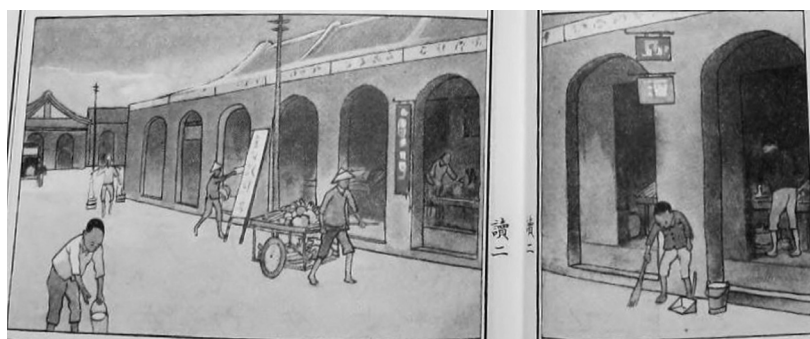


図3 第四期「公学校用国語読本」卷二の第二十三課

(二) 国語講習所の国語教科書について

国語講習所で使われた1933年版と1939年版の新国語教本は、教育対象と地域の特性上、都市と農村の違いを最初から意識して編纂されていた。特に国語講習所は家庭や経済的な原因で公学校へ通えなかった台湾人青少年を対象とし、受講生の生活や経済背景に合わせて農村や労働者が日常で使うような教材内容が中心となっている。

しかし、新国語教本は共通の教科書であるため、都市や農村で兼用できるように工夫されていることも図4と図5の挿絵からみられる²⁴⁾。図4は1933年版「新国語教本」卷二「私の庄」の挿絵である。紹介されているのは千戸ある庄(地方)であるが、挿絵には軒並んでいる家と離れて建てられている屋敷、工場もあり、すぐ裏にはたくさんの田んぼも描かれている。この庄は都市であるか農村であるかを明言せず、両方の風景が含まれているように挿絵で内容の不足を補っている。このような取り扱いは1939年版の「新国語教本」卷一(図5)にもみられる。

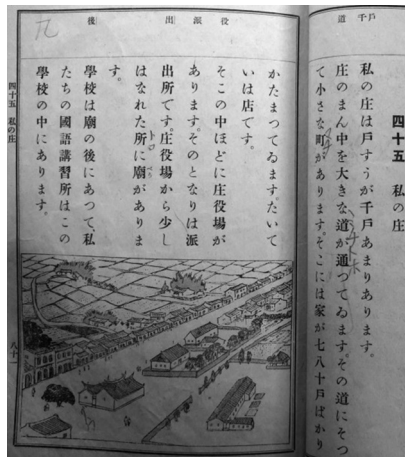


図4 1933年版新国語教本巻二



図5 1939年版新国語教本巻一

おわりに

1930年代の植民地台湾に現れた都市と農村の教育問題に関する議論は、主に「植民地経済の発展」によるものだった。本稿は台湾人用の国語教科書に対象を絞り、教材の編纂や教材の取扱いの両方においての都市と農村の格差問題について検証を行ってきた。

確かに実際の教育現場、特に農村の公学校においては、都市と農村の違いによる教育上の格差問題が存在しており、公学校や国語講習所の国語教科書の編纂にも影響を与えていた。ただし、公学校で使用する教科書は社会教育に属する国語講習所用の物とは違い、教材の選択において、1937（昭和12）年以降の第四期国語教科書に現れる都市と農村の差が最低限に抑えられるようになった。それに対し、国語講習所用の1939年版新国語教本では、初級段階の教材は都市と農村で兼用できるように配慮されていたが、最終的に都市用と農村用にと別々の教科書を刊行するようになった。特に当時第四期の公学校用国語読本と1939年版「新国語教本」の編集責任者はともに加藤春城だったが、使用対象が違うことによって都市と農村問題の対処は全く違う方針が取られていたことも、本稿の分析によって明らかとなった。今後はさらに植民地台湾における様々な教育問題に着目し、特に台湾社会や児童生活に関わるテーマを中心に、国語教科書の教材研究を進めていきたいと考えている。

【謝辞】 本研究はJSPS科研費（課題番号15K17366）の助成を受けたものである。

注

- 1) 高成鳳、『植民地鉄道と民衆生活 朝鮮・台湾・中国東北』（1999.2.26）、法政大学出版局、pp.151-152。
- 2) 同上1、p.75。
- 3) 張清波、「農村教育に就ての私見」、『台湾教育』280号（1925.10.1）、pp.36-39。
- 4) 同上3、p.36。
- 5) 同上3、p.39。
- 6) 黄連發、「農村と子供」、『民俗台湾』v003n010（1943.10.1）、pp.9-13。
- 7) いそきんちゃく生、「農村に於ける公学校卒業生は何処へ行くか」、『台湾教育』328号（1929.11.1）、pp.93-99。
- 8) 同上7、pp.93。
- 9) 同上7、pp.94。
- 10) 同上5、pp.39。

- 11) 加藤春城、「国語教授視察雜感 — 台南高雄兩州下に於ける —」、『台湾教育』397号（1935 発行日不詳）、pp.77-82。
- 12) 同上 11、pp.77。
- 13) 同上 11、pp.78。
- 14) 同上 11、pp.80。
- 15) 加藤春城、「公学校用國語讀本卷一、卷二編纂要旨（中）」、『台湾教育』420号（1937）、pp.39-55。
- 16) 陳虹彪、「日本統治下台湾における国語講習所用国語教科書の研究 — 台湾教育会の『新国語教本』に着目して —」、『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第54集第2号（2006.6）、pp.63-89。
- 17) 台湾教育会、「第三回代議員会」、『台湾教育』371号（1932.6）、p.7。
- 18) 台湾教育会、「台北通信」、『台湾教育』480号（1942.7.1）、p.81。
- 19) 「都市と農村」（「青年学習書 卷一」より）、「青年と台湾」（1939.11.15）pp.15-17。この教材を収録している「青年学習書 卷一」という教科書は公学校や国語講習所以外の場所で、地域の台湾人青年を対象としたテキストだと思われる。
- 20) 台湾教育史研究會策畫（2003）。日治時期台灣公學校と國民校國語讀本復刻版。台北：南天書局。公学校用國語教科書の写真はこの復刻版の教科書を撮影したもの。
- 21) 加藤春城、「公学校用國語讀本卷一、卷二編纂要旨（中）」、『台湾教育』420号（1937）、pp.39-55。
- 22) 加藤春城、「公學校用國語讀本卷一、卷二編纂要旨（下）」、『台湾教育』421号（1937）、p.6。
- 23) 同上 22、p.14。
- 24) 新国語教本の写真は玉川大学が所蔵している教科書を撮影したもの。

A Study of Urban and Rural Issues in Japanese Language textbooks for Taiwanese under colonial rule

CHEN, Hung Wen

In Colonial Taiwan, the educational gaps of urban and rural areas were discussed during the 1930s. I analyzed the Japanese language textbooks for Taiwanese to discover the disparity of materials and how the materials be used in the classroom. Then I found the disparity between Urban and Rural was actually existed and it influenced the editorial policy of the language textbooks of public elementary school and Japanese continuation school. And also by the users of the textbook are different, different policy of choosing teaching materials had been taken.